

『和泉式部日記』成立試論

——「源重之女集」「子の僧集」との関連をめぐって——

渦 卷 恵

一 日記の作者について

『和泉式部日記』は古くから「和泉式部物語」とも称されるように、主人公和泉式部を三人称表記し、和泉式部の知りえぬ場面までが詳細に描かれた、多分に虚構を交えた物語的な日記である。

したがって『日記』の作者について、和泉式部と帥宮のエピソードを第三者が物語としたという他作説が示され、川瀬一馬氏がその裏付けに寛元本奥書から俊成作とする説を提示されて以降、自作説を交えてさまざまに論じられてきた。

他作説の根拠のひとつとなったのは、『日記』に宮邸での様子が書かれる点であるが、このことについては「超越的視点」という観点から解釈する説が支持され、さらに『日記』と「和泉式部集」との歌の詠風的一致から、現在では『日記』を自作であるとする説がおおむね有力のようである。津本信博氏のように、宮邸の情景描写の具体性から、「宮側に身を寄せた人物の作品形成時における関与」を指摘する説もあり、決着がつか

たとは言いがたいものの、以上の先行研究を振り返ると、『日記』が自作であるとして、では、どこまでが和泉式部の創作によるのかということが問題になっていると思われる。

さて、小町谷照彦氏は自作を前提に日記歌を分析するなかで「ながめ」という女歌の典型的な表現が和泉式部と宮と同数見出せることなどをとりあげ、『日記』に配される帥宮の歌自体が和泉式部自身の創作であるという可能性について、

「和泉式部日記が贈答歌に終始するということは、作品世界がむしろ自己の想念の世界における自問自答によって進展することになり、まさに独自の性格を呈することになる。和泉式部の歌と帥宮の歌との間には、決定的な対立や懸隔はない。和泉式部は、帥宮との贈答歌をひたすら自己の体系に則して作品として秩序立てしているのであり、帥宮の歌をも和泉式部がすべて詠作したとしても、作品の世界の性格は少しも変わらない、といつてもよい」

と示された。小町谷氏の論は『日記』の贈答歌を精緻に読み解

くなかで、歌語や趣向の特徴を踏まえて提示されたものであり、きわめて魅力的な説である。

こうしたご指摘の一方で、小松登美氏は、『日記』の宮の発言にある「殺す」という語、および白河院に花見に行った際に宮が詠んだ「花盗人」という語から、

「平安時代の上流貴族としては明らかに異色の、一種のどぎつさと言うか、偽悪趣味とでも呼ぶべきものがあり、その異色ある用法は、宮の個性の一面を反映している」と見るべきであろう」

と『日記』の宮の歌にはやはり宮独自の詠風が認められるという¹⁾ことを論じられた。

また、武田早苗氏は、さらに「寝たる夜」「寝ぬる夜」という用語や、宮の歌にのみ見出される読み癖を指摘し、

「宮」の和歌には、出来事を直截に表現し、しかも類似表現や、類似の構成を繰り返し用いる傾向があったと想定してよいのではないだろうか」

と、小松氏の見解をさらに深めて、宮の歌の独自性について論じられた。

果たして帥の宮の歌が和泉式部の創作なのか。あるいは宮の歌は真実、宮の歌として詠まれたものを『日記』に記したものの²⁾か。あるいは部分的に和泉式部が手を加え作品としての完

成度を高めたのであろうか。

『日記』の成立を解く鍵を外部資料に求められないのであれば、やはりその内実から究明していくより手立てはないであろう。本稿も『日記』歌に注目し、いささか私論を呈したい。

二 和泉式部と源重之女の關係について

ここで『日記』から目を転じ、和泉式部と源重之女の關係について触れておくことにする。

和泉式部が若い頃に試みたとされる百首歌と源重之女の百首歌の關係については、すでに諸氏のご指摘がある。両百首ともに、曾祢好忠や源順、惠慶ら河原院文化圏を中心に流布した初期百首の系譜に位置づけられるものである。重之女の父は東宮に献上する百首を詠んでおり、成立は不明ながら父が陸奥に下向した九九六年以前には成っていたと考えられている。和泉式部百首の成立もわからないものの、吉田幸一氏は『枕草子』に和泉式部百首の歌が引かれていることから、少女期の正暦年間作かと推測されている。となると、重之女と和泉式部百首はほぼ同時期に成立した可能性が高いということになる。

平田喜信氏は、重之女百首と和泉式部百首において、詠まれる歌材と配列がびつたり一致する部分がある、また、呼応するかのような、まるで贈答歌や唱和歌のような歌があるといった例を具体的に挙げてその密接な關係を指摘された。ただし、両百首の先後關係については断定を避けられ、

「重之女百首の先出を想定することができそうである」（論文付注）

と推測されるにとどまった。

また、久保木寿子氏も、

「先後関係は確定しがたいが、和泉式部集百首の示す素材の多様性、趣向の複雑化、寄物恋的表現などから判断すると、重之女百首成立の後に和泉式部百首が成立したとみる方が蓋然性が高いと思う」

と、平田氏同様に、両者の関連を認めた上で、重之女が先、和泉式部があと、という推論を提示された。

稿者もまた、「重之女集」の歌風を分析する中で読み癖に注目し、重之女百首が先行する可能性が高いことを論じた。

さらには、百首以外にも「和泉式部集」と「重之女集」との関連が指摘されている。

平田氏は、「重之女集」末尾歌一一五番

ながからぬいのちまつまのほどばかり

うきことしげくなげかずもがな

と、「和泉式部集」末尾歌

ありはてぬいのちまつまの程ばかり

いとかく物をおもはずもがな

の類似を示された。

両集の末尾にこのように類似した歌が置かれていることは極めて興味深い。類歌は『古今集』と『大和物語』にも次のように見出せる。

有りはてぬいのちまつまのほどばかり

うきことしげくおもはずもがな

（古今集九六五番 平貞文）

ありはてぬいのちまつまのほどばかり

うきことしげくなげかずもがな

（大和物語第四百四十二段 故御息所の御姉）

これらについて、平田氏は「古今歌が大和で女歌として転用され、女歌の典型的なものとして当時の女性達に愛好された」と推測し、「和泉の歌のみに見出される「物をおもはずもがな」という表現も、重之女集の巻末歌を意識しながら、歌群の末尾にあえてこの作のバリエーションとなる一首を付置しようとした意図した和泉による意識的変改部分とは考えられないだろうか」と論じられた。

ご指摘のほかにも「重之女集」と「和泉式部集」における類似歌と思われる例は次のように見出せる。

もみぢはて秋はくらしつ神無月

いまはしぐれになぐさまぬかな
ふゆのはじめに
(重之女集五二番)

もみぢみて秋はくらしつかみなづき

いまはしぐれのそらをながめむ
(子の僧集五八番)

花みてもひをばくらしつ青柳の

いとくるしきはよるにぞ有りける

(和泉式部集五九八番)

「子の僧」というのは重之女の兄弟である。重之女と子の僧は「紅葉」を詠み、この二首の表現が酷似することは、すでに指摘されている。和泉式部は「花」を詠み、その点では異なる趣向になっている。しかしながら、「何々を見て、くらしつ」と詠むのはほかには次の『源氏物語』竹河巻にしか見出せない。

花を見て春は暮らしつ今日よりや

しげき嘆きの下にまどはむ

「くらしつ」という表現を検索しても次のように「高遠集」にあるばかりである。

みちにて、まつのかげにやすむとて

松かげにけふはくらしつあすよりは

ゆくすゑとほきここちこそすれ
(一一八一番)

このように類例が少ないため、この和泉式部の「花みてもひ

をばくらしつ」の歌もまた、重之女ないしは重之の子の僧から撰取した表現である可能性が高いように思う。

三 日記歌と重之女集

さて、重之女から和泉式部集への影響を振り返ったところで、『和泉式部日記』の次の場面に注目したい。

かくて明かすべきにやとて、

はかもなき夢をだに見て明かしては

何をかのちの世語りになむ

とのたまへば、

「世とともにぬるとは袖を思ふ身も

のどかに夢を見る宵ぞなき

まいて」と聞こゆ。「かろがろしき御歩きすべき身にもあらず。なさけなきやうにはおぼすとも、まことにものおそろしきまでこそおぼゆれ」とて、やをらすべり入りたまひぬ。いとわりなきことどもをのたまひ契りて、明けぬれば帰りたまひぬ。すなはち、「今のほどもいかが。あやしうこそ」とて

恋といへば世のつねのとや思ふらむ

今朝の心はたぐひだになし

御返り

世のつねのことともさらに思ほえず

はじめて物を思ふ朝は

と聞こえても、「あやしかりける身の有様かな、故宮のさばかりのたまはせしものを」とかなしくて、思ひ乱るほかに、例の童来たり。御文やあらんと思ふほどに、さもあらぬを心憂しと思ふほども、すぎずきしや。

初めて和泉式部のもとを訪れた宮が、いささか強引に契りを結ぶ場面である。ここで詠まれた「恋といへば」の歌が、実は次の重之女歌に酷似しているのである。

恋といへば世のつねのとや思ふらむ

今朝の心はたぐひだになし

いへば世のつねのことや人はみむ

われはたぐひもあらじとおもふを

(日記歌)

(重之女集八九番)

なお、重之女の歌は「玉葉集」では三句目が「おもふらん」五句目が「あらじともふに」となっている。日記のこの部分の本文の異同は管見の範囲では見出せない。

この重之女歌と日記中の「恋といへば」の二首は「言へば」

「世の常」「とや」「たぐひもあらじ」「たぐひだになし」ときわめて似た表現が用いられているばかりではない。それぞれの歌の内容についても、重之女歌は「口に出して言ってしまったえば世の常のことと人は思うでしょう。私の恋心はほかと比べようもなく思うのに」という意であり、一方日記歌は「恋という言葉で言ってしまったえば世の常のことと人は思うでしょう。今朝の

気持ちは人と比べようもなく思うのに」と全く同じ調子で詠まれているのである。

また、通常恋の歌において「世の常」という場合は、

伊勢なん人にわすられてなげき侍るとききてつかはしける
贈太政大臣

ひたぶるに思ひなわびそふるさるる

人の心はそれぞよのつね

返し

世のつねの人の心をまだみねば

なにかこのたびけぬべきものを

(後撰集八三二・八三三番)

と、恋心のおぼつかなさとともに詠むのがほとんどといってよい。『日記』中の和泉式部詠にも、

しかばかりちぎりしものをさだめなき

さはよのつねにおもひなせとや

(日記一三三番)

が見出される。

ところが、ここでは両首ともに「相手への恋心」を「世の常の恋心」と比較するという特異な発想で詠まれているのであるから、無意識の類似とは思われない。重之女の歌の表現を日記歌が摂取したのではなからうか。

さらに注目されるのは、『日記』の「こひといへば」は和泉

式部の歌でなく、宮の歌であるという点である。『日記』の該当箇所は初めて和泉式部のもとを訪れ、逢瀬をもつた帥の宮が、和泉式部に送った後朝の歌である。和泉式部はこの歌の「世の常」という表現に対して「世の常のことともさらにおもほえず初めてものを思ふあしたは」と返す。そして、不思議な自分の運命を「あやしかりける身かな」と振り返る。宮の情熱的な行動を受け入れつつ、心が弾みながらも自己を反省する和泉式部の複雑な心中が現された、『日記』冒頭部における最大のクライマックスといえる贈答の場面と言えよう。

では、この大事な場面で、どうして重之女の歌が出てくるのだろうか。宮と重之女に何か接点はあるのだろうか。

この歌以外に重之女と宮の歌の表現の類似は管見では見出せない。重之女百首は初期百首としてある程度は流布したものとされるものの、宮が、和泉式部との交際を始める以前に「重之女集」を見ていた可能性は少ないと思われる。たとえ宮の手に「重之女集」があったとしても、大切な後朝の歌に重之女歌をなぞる歌をわざわざ贈るだろうか。

では、この歌が和泉式部の創作であると考えるとどうだろうか。宮と式部の大切な思い出の場面をより情熱的なものとして演出するために、宮が本当に詠んだであろう後朝の歌を、あえて和泉式部自身が創作したものに差し替えて日記に記したと考えるのは、いささか穿った見方であろうか。

実は、この箇所について、小松登美氏は『和泉式部日記全訳注』（講談社学術文庫）において、後朝の文は通常は歌にさらに引き歌を添えるのが一般的であるのに、この部分に引き歌が

ないことを指摘され「日記が省略したカタチをとったか、こういう形式の文も並存していたのであろうか」とその不自然さについて言及された。

一般的な後朝の詠みぶりでない不自然さは、これが和泉式部の創作に拠ったため、と考えられないだろうか。創作であるとすれば、それが創作であることを気づかせないために第三者の歌を流用すれば、自身の歌とは異なる雰囲気は自然と醸し出されることになろう。

つまり、和泉式部が出会いを演出する手段として、この大切な場面で重之女歌の表現を模取して宮の歌として『日記』に載せたのではないだろうか。

四 日記歌と子の僧集

さらに気になる用例がある。先に引用した当該歌の一つ前の宮の歌に似た歌が、重之女の兄弟である「子の僧集」にも見出せるのである。

はかもなき夢をだに見て明かしては

何をかのちの世語りにせむ

あふこともなくてやみぬるものならば

何を此世の思出にせん

（日記歌）

（子の僧集四九番）

先の重之女歌と宮歌ほど表現はびたりと一致してはいないものの、ともに「何を…せん」と共通の表現を持ち、この逢瀬を

のがしたら、何を思い出したらよいのか、と嘆く歌である。
同時代の山田法師に

あはれなり消えはてぬともうきならで

何を此世の思出にせん
(新拾遺集一八六七番)

と、子の僧と下の句を同じくする歌があり、言い回しとしてはさほど特徴があるわけではないので、あるいは、子の僧と宮の歌は無意識の類似ということかもしれない。またこの日記歌本文には「なにをか夏のよがたりにせん」というものもあり、その場合「夜がたり」の「世」は「夜」ということになるため、慎重に考えるべきであらう。

そこで、新編国歌大観で「何を…せん」という表現を探すと次の例しか見出せない。

月をながめはべりて

月かげのくもがくれぬるものならば

なにをうきよのなぐさめにせん
(子の僧集二六番)

はなもみなよふくる風にちりぬらん

なにをかあすのなぐさめにせん

(和泉式部集五九三番)

あはれなることしのしるしのみえざらば

なにをかのちのかたみにはせん

(宇津保物語 さがの院)

月のくまなうあかきに、たいふさとなるを思ひや

りて、
右近

こころすむあきの月だになかりせば

なにをうき世のなぐさめにせむ

(大斎院御集一二二番)

ここでも、子の僧歌「なにをうきよのなぐさめにせん」と和泉式部歌「なにをかあすのなぐさめにせん」の似た言い回しが見いられていることも注目に値しよう。

ともかくいま一度『日記』本文を振り返ると、「子の僧集」の歌に似た歌「はかもなき」を宮が詠み、和泉式部が返しをし、逢瀬があり、翌朝宮から、今度は重之女の歌にきわめてよく似た「恋といへば」という歌が送られてきたということになる。

つまり、宮は子の僧の歌の類似歌の次に重之女の表現に習った歌を連続して詠んでいるということになる。

このクライマックス部分に並んで見出せるこうした現象はたまたまの偶然の一致ということなのだろうか。あるいは宮自身が重之女と子の僧の歌集を念頭に置いて、それぞれから一首ずつ連続して表現を撰取したのだろうか。やはり、先の歌同様に、この歌もまた宮の歌でなく和泉式部自身の創作というふうには考えられないだろうか。

「子の僧の集」については、鈴木二雄氏らにより、「針切」から集の原型が探られ、初期百首の系譜に位置づけられている。

平田氏は「子の僧集」を検討される中で、「重之集」における家族間での歌の詠み合いに注目され、発想・用語の重なりや類似が多く見出されることから「重之詠歌圏」を想定された。

また、和泉式部百首の冒頭歌が、立春解氷を聴覚によつて表現する点で重之、重之女、子の僧の詠みぶりに重なることを指摘され、次の「小松引き」の歌の表現の一致も挙げられた。

ねのびに、むかしをこふるころ

ひきつれてかすがののべの子の日する

けふはむかしのはるぞこひしき

ひきつれてけふはねのびのまつにまた

今千とせをぞのべに出でつる (和泉式部百首 三番)

(子の僧集八番)

こういったご指摘のほかにも、「和泉式部集」と「子の僧集」の表現の一致は次のように見出される。

○「けぬるし」

こち風もけぬるくなればわがやどの

むめのにほひををりをりぞみる

をぐら山おほるのかはもはるたちて

かすみわたればけぬるかりけり

(子の僧集三番)

(同 七番)

この「気ぬるし」という表現は新奇で、ほぼ同時代の「馬内侍集」に、

正月に、空のけしきなどもよし、よめと宮の仰せられしかば

浦ごとにあまはみるらんはつ春の

けぬるき風に浪やなごまむ (九七番)

と詠まれるほかは、管見では和泉式部百首に

見わたせばまきのすみやくけをぬるみ

おほ原山の雪のむらぎえ

(七二番)

とあるのみ。すべて寒気が緩み春らしく暖かくなる景を詠む点で共通し、注目に値しよう。

○「道芝の露」

おぼつかなきみちのしるべする人のわかるるところにて

みちしばのつゆうちはらひしるべする

人をいづれのよにかわすれん

(子の僧集四八番)

和泉式部百首にも、

夏のひのあしにあたればさしながら

はかなくきゆる道芝の露

(和泉式部百首二四番)

と詠まれるが、他には、

女のもとにものをだにいはいはんとてきたりける人、あしたに

きえかへりあるかなきかの我が身かな

うらみてかへるみちしばのつゆ (小大君集六二番)

…かへしせよとこれゆづりにいひしほどひさしうな
りしかば、かくなむ

かひなくてありあけのつきにかへりなば

ぬれてやゆかむみちしばのつゆ (高遠集三二番)

といった例がわずかに見出せるのみである。そして、看過できないのは「和泉式部日記」にも次のようにこの表現が見出せることである。

道しばの露とおきある人により

我がたまぐらの袖もかわかず

この日記歌は、「手枕の袖」という歌語を中心とした一連のやり取りの中で詠まれた、和泉式部の歌である。宮が、

露結ぶ道のまにまに朝ぼらけ濡れてぞきつる手枕の袖

と詠むのに返したものの。このあとも「手枕の袖」は二人をつなぐキーワードのように応酬に登場する。

以上から、「子の僧集」と「和泉式部集」の關係は色濃く思われ、和泉式部が日記を創作する折に、まったくの第三者である「子の僧集」の歌を参照したとするのはあながち突飛な論とも言えないだろう。

五 まとめ

「重之女集」が和泉式部に影響を与えたということは確実である。さらに「子の僧集」と「和泉式部集」の密接な関連性もうかがい知れる。本稿では、『和泉式部日記』に両集にきわめて類似した歌があることを指摘し、さらにその帥の宮歌が和泉式部の創作である可能性を新たに示した。わずかに二首の歌をもって、『日記』の成立に関わることを論じるのはいささか大胆であるうし、なぜ重之女、子の僧の歌をことさら選択したのか、なぜ、『日記』の冒頭部だけに連続して置かれたのか、当時の享受者たちは重之女、子の僧の歌との類似を知らなかったのか、さらには現在見出しえぬ別の用例がある可能性など、残された問題は多い。試論を呈し、後考を待ちたい。

注

- (1) 「和泉式部日記は藤原俊成の作」青山学院女子短期大学紀要二 昭和二十八年九月
- (2) 「和泉式部日記」作者考―自作説への疑問―『平安朝文学の諸問題』笠間書院 昭和五二年二月
- (3) 「和泉式部日記の贈答歌の達成」『論集和泉式部』笠間書院 昭和六三年九月
- (4) 「和泉式部正集白河歌群御宮歌をめぐって」その二 跡見学園短期大学紀要二七 平成三年一月
- (5) 「和泉式部日記」の「宮」の和歌について「相模国文」二二号 平成六年三月
- (6) 平田喜信氏「和泉式部百首の成立」大妻国文二号 昭和四五年三月

- (後)に『平安中期和歌考論』所収、久保木寿子氏「和泉式部百首恋歌群の考察」国文学研究六九号 昭和五四年一〇月、小松登美氏「和泉式部百首歌群小考」跡見学園短期大学紀要昭和六一年三月(後に『和泉式部集の研究』所収)など
- (7) 「和泉式部の娘時代とその詠草」平安文学研究七〇輯 昭和五八年一二月
- (8) 注6論文
- (9) 注6論文
- (10) 「重之女集の歌風について」小山工業高等専門学校研究紀要 昭和六二年三月 なお、以下の和歌の本文は『新編国歌大観』に、『和泉式部日記』の本文は『新編全集』に拠る。
- (11) 「『もの思へば』『もの思ふ』考」王朝和歌と史的展開『平成九年一二月 昭和五五年三月
- (12) 鈴木氏「針切本重之の子の僧の集」墨美四〇号 昭和二九年一二月、目方さくを氏「源重之集・子の僧の集・重之女集全釈」風間書房 昭和六三年九月、久保木哲夫氏「重之子僧集」解題『新編国歌大観』私家集編七 平成元年四月、など。
- (14) 「重之の子の僧の集」と「重之女集」―重之詠歌圈と和泉式部―小論一四号 平成一二年九月(後に『平安朝文学 表現の位相』に所収)
- (15) 拙稿「重之の子の僧の集」の性格」埼玉短期大学研究紀要一〇号 平成一三年三月にて指摘。

〔付記〕

本稿は、二〇〇七年度中古文学会春季大会(於國學院大学)における口頭発表を纏め直したものである。席上多くのご教示をいただきましたことに、感謝申し上げます。

(うずまき めぐみ 平成国際大学非常勤講師)